

人類は、より大きな力を得ることにはたけているが、その力を幸せに転換する能力は高くない

～上記の言葉は、下記の記事より～

<著者に会いたい>

『サピエンス全史 文明の構造と人類の幸福』(上・下) ユヴァル・ノア・ハラリさん(40歳)

朝日新聞 2016年10月23日

(文中の太字は引用者によります)

対話重ね 大きな問いに挑む

取るに足らない生物だったホモ・サピエンスが、なぜ地球を支配するに至ったのか。中世ヨーロッパの軍事史を専門とする研究者が「一つの時代、事件ではなく歴史の全体像を示したい」と挑んだ労作は48カ国で出版され、世界的ベストセラーになった。

本の土台は、所属するイスラエルの大学で受け持った世界史の講義。読みやすさの源泉は、学ぶ側と重ねた「対話」だろう。「学生と意見を交わす中で、学生が何に興味を持ち、どこに力点を置くべきかが分かり、構想が固まった」。最初はヘブライ語で出版し、読者の反応を踏まえて改訂を加えた英語版を出した。

影響を受けた著書に、やはり人類史というテーマに取り組んだジャレド・ダイヤモンド氏の『銃・病原菌・鉄』を挙げる。「大きな問いに対して科学的な方法で答えている。しかも一般の人にも分かるストーリーにして。執筆の一つのモデルになった」。氏に2度会い、刺激を受けた。

本書は人類の歩みを、**言語獲得による「認知革命」、農耕を始める「農業革命」、そしてヨーロッパ発の「科学革命」**を軸に論じた。ユニークなのは、大変革が人々の幸福にどう関係したかという視点だ。たとえば**農業革命によって、人々は狩猟採集より過酷な単純労働を強いられ、一面では不幸になった**と考える。「**人類は、より大きな力を得ることにはたけているが、その力を幸せに転換する能力は高くない**」と喝破する。

未来に楽観的か、悲観的かと尋ねると、一度スルーされた。「リアリストとしては前もって評価することは難しい」というのが真意だったようだ。歴史家は、**人工知能や遺伝子工学**が起こすであろう「今までで最大の革命」の姿を見定めようとしている。(柴田裕之訳、河出書房新社・各2052円)

文・吉川一樹

<この文書は、「こんな言葉」(下記URL をクリック) に掲載されているものです。>

<http://fileshelf.cocolog-nifty.com/blog/2020/11/post-5076.html>